九州産業大学国際文化学部紀要　第15号 61—79 (2000)

古代ギリシア・ローマ人のインド理解〔II〕

二　木　敏　篤

(1999年11月30日受理)

6．自然環境の知識について

古代ギリシア・ローマ人のインドの自然に関する知識はきわめて貧弱である。特に地形にはほとんどふれられていない。ただアッリアノスが「インドの北を限るのはタウロスだが，まだこの地方ではタウロスと呼ばれていない。タウロス山はパンピュリア，リュキア，キリキアのあたりで海から起こり，アジア全土を横断して東の大洋までえんえんと伸びているのである。この山は各地でさまざまに呼び慣わされ，あるところではパラパミソス，あるところではエモドス，また別の土地ではイマオンと呼ばれ，おそらく他にももっとさまざまな名前を有している。アレクサンドロスとともに遠征したマケドニア人たちは，この山をカウカソスと呼んだが，これはかのスキュテアのカウカソスとはまったく別物のカウカソスなのだ。そこ（名称の混同）からしてアレクサンドロスは，かのカウカソスの彼方にまで踏みこんだという説が広くおこなわれているのである」[1]。と述べている程度である。プリニウスもこれらの連続した連山があり，それからなだれ下って，エジプトのそれに似た広大な平野をなしていることをあげ，「ヘモデイ山脈（それの突出部はイマウス山脈）と呼ばれているが，それは土語で（雪のあるという意味である）」[2]と記している。これはヒマラヤ Himalaya とは，サンスクリット語のヒマ hima（雪）とアーラヤ alaya（住居）との合成語，つまり〝雪の住みか〟を意味していると言われており，恐らく両者は同根から命名されたのではあるまいか。

前述したようにインダス，ガンジス川については多くの人がふれている。アレクサンドロスの東征の最後の舞台がインダス川流域地方だっただけに関心も深く多くの観察がなされたことも一因であろう。「インドス河，それからヒュダスペス，さらにアケシネス，ヒュアロティス，そしてヒュパシスが最後の川になった。すなわち，これより向うまで進むのを遮られたわけで，…将兵がすでにこれ以上の苦労をすることに不満を訴えたのに押し切られたためだった。兵たちはとりわけ長雨にたたられ，その雨水がもとで病にかかっていた。従って，インド地方の東寄り区域のうちヒュパシス川

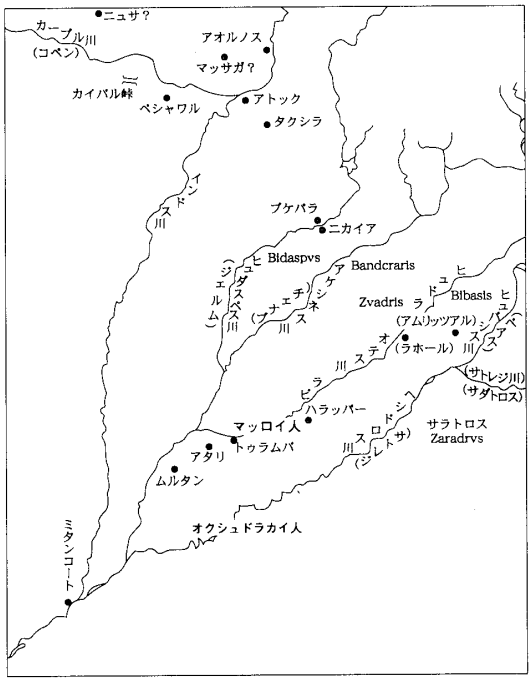

図1 パンジャブ地方：インドス川からヒュパシス川へ
アッリアノス「東征記」による

より内側（西）のこれらの地域はすべてわたしたちに知られるようになった。大王のつぎに，この川を越えてガンゲス河やパリボトラ市まで進んだ人たちが新たに報告している事項もいくつかあるが，それにしても（この時の知識は大きかった）」[3]。

「インドの地の西方はインドス川が，これを〔南の〕大洋にいたるまでずっと仕切っている。大洋側ではインドス川は二つの河口によって海に注いでいるが，その二本の分流というのは，イストロス（ドナウ）川の五本の分流のようには，お互いに河口をひとつに合わせることをせず，エジプトの三角州を形成するかのナイル川の場合と同じようになっている。インドス川もそんな風にインドの三角州をつくっているのであって，その三角州の大きさ，エジプトのそれにも劣らず，インド語では（パタラ）という名で呼ばれているのである。…（アレクサンドロスやマケドニア人たち，また多くのギリシア人）もヒュパシス川より先の方まではついに踏み込むことがなかったのだ。とはいえガンゲス川にいたるまでの土地土地のことや，ガンゲス川沿いにあるインド人の都市のなかでももっとも大きい。パリンボトラ（パタリプトラ）の町がどこにあるのかについて，書きとめたひとも少数ながら，いることはいるのである。…彼（エラトステネス）はインドス川の水源があるタウロス」[4]山脈と記している。さらに，アッリアノスは「インドの河川はいずれも，他のアジアのどの河川も及ばぬ程に大きい。なかでも最大の川はガンゲスとインドスの両河であって，インドの地もこのインドス川からその名を得ているのである。この二本の川ともエジプトのナイル川やスキュティアのイストロス（ドナウ）川より大きく，この両河（ナイル，イストロス）の

流れがたとえ一本にまとまったとしても，それよりさらにいっそう大きい。それどころか私が思うには実際アケシネス川でさえ，イストロスやナイル川よりも大きいのだ。この川はヒュダスペス，ヒュドラオテスそれにヒュパシスの諸河川を取りこんだあと，インドス川と合流するのだが，川幅はその合流点では三十スタディア〔5.5キロメートル強〕にも及ぶのである。インドにはこれらのほかにもおそらく，大きな河川が何本となく貫流していることだろう」[5]。と。また『エリュトゥラー海案内記』では「この地方の後には湾が深く入り込んでいるために今や海岸が東から海中に突出しているが，真北に横たわるスキュティアの沿海の部分が続き，実に低平な地方で，其処からシントス河が〔海に注ぐ〕。これはエリュトゥラー海の河の中で最も大きくかつ極めて多量の水を海中に注ぐので遠くまで，そして人が陸地に近づくより前に，この河からの清い水がやって来るのである。…この河には七つの河口がある」[6]。と記されている。しかし，ナイル河については上流部が不明のためかなり小さく認識されていたようである。

河川河口部に形成されるデルタの成因について最初に言及した人物の１人としてヘロドトスがあげられる。「エジプトの地域は，いわば〝(ナイル) 河の贈物〟ともいうべきもので，エジプト人にとっては新しく獲得した土地なのである」[7]。とは有名な言葉であるが，彼は河川の堆積作用について語り，エジプト人の生活と河川との関わりについて詳細な説明をその著作『歴史』で行っている。ストラボンは「ネアルコスは川が作る沖積地帯についてつぎのような成因例を持ち出す。…平野上に土が運ばれてきて堆積してそれらの平野を広げるというかむしろ造成することがその要因である。堆積土は山地から運ばれて下り，すべて地味がよく柔らかい。運び下るのは川だから，平野は川に対していわば川の申し子のような関係になり，平野は川の一部だという方がよい。以上の説明はヘロドトスがナイル河とその流域の土地について語る《その土地の河の贈物だ》という文句と同じであり，従ってネアルコスが《ナイルはエジプトの同義異語としても用いられている》と述べているのは正しい」[8]。を引用してアリストブロスとネアルコスはインドの河川の氾濫と，そして洪水後の稲ときびの栽培について述べており，なお，氾濫により流路が変わり千を越す市や村が無人の地になったのを見ている[9]。「それはインドス河が本来の流れを捨てるともっと左へ向きを変えて別の流れとなり，しかも以前よりはるかに深いくぼみを流れるようになったからだった。河は滝のように落下するから右手に取り残された地方はもはや河が氾濫する頃にさえ水が当たらなかった。土地は，新しい流れだけではなく氾濫した水よりまだ高いところにあった」[10]ことを観察している。

次に気候とその降水に伴う河川の堆積作用をみることにする。「インドでは夏に，そ

れもとりわけ山地帯に雨が降る。パラパミソスとかエモドスとかイマイオンといった山々だが，そういった山々からはまた，巨大な濁り川が幾本となく流れ下るのである。インドの平地でも雨は夏に降り，そのため平地は一面水浸しになってしまう」[11]。これはいまもインドの夏にはよく目にする光景である。ストラボンも「エラトステネスによるとインド地方は，これほど多くの河川から立ち昇る水蒸気と南西からの季節風の影響で，夏季には雨が降り平野は沼地になる」[12]とほぼ同様な記述があるがこの出所はエラトステネスであるのはほぼ間違いなかろう。

「アレクサンドロスの軍勢が夏の盛りにアケシネス川を避けたのも，ちょうどそのころ平野部一帯に出水があったからだ。このことからしてナイル川の例の洪水も，おそらくは夏，エチィオピアの山地で雨が降ってそれでナイル川が増水し，川水が岸部を超えてエジプトの土地に溢れだすためだと立証することができる。それでこの季節にはナイル川も濁っているので，雪どけ水ならばこうは流れないだろうし，夏間に吹く〔北西〕季節風のせいで川水が逆流させられるとしても，そうはならないだろう」[13]。と，インドの夏を代表する北西季節風につきナイル川と対比させて説明している。これは紅海とインドを結ぶ海上交通にはこの風の利用がかかせなかったことも関係したのであろう。また，ナイル河氾濫の原因についての正しい理解があったことがわかる。「航海者はインドの〔季節風〕に乗ってユーリオスの月，即ちエピービの頃に出航する。この風によって航海は危険ではあるが船足が速くかつ短くてすむからである」[14]と述べている。プリニウスも「インドは西風の流れにさらされる利点をもち，それによって，健康地となっているのだということを示した。彼の国においては天空の様相と星の出が違っていて，定期風をともなう冬を挟んで，一年に二度の収穫があり，わが国の真冬にもそこには柔らかい風が吹き，海は航海できる」[15]と記しており，インドの農業がこの自然を利用して二毛作がおこなわれたと考えているようである。

「アリストプロスによると，山岳地帯とその麓だけは共に雨と雪の何れにも見舞われるが，平野は雨と雪の何れにもひとしく縁がなく，諸川が増水するにつれて冠水するだけである。山岳地帯は冬季のあいだ雪が降り，春がはじまると雨もはじまる。降雨は絶えずますます増えつづけ，(南西からの)季節風の頃には絶え間なく昼夜を分かたず豪雨となって降り注いで，牛飼座の星が空に現れはじめる頃までつづく。だからこそ，諸川は積雪と雨水にあふれながら平野を潤す。…（ネアルコスも）平野では，夏期には雨が降り冬になると雨がなくなる，という」[16]。とあり，インドの季節風についての知識はかなりのものであったようである。前にも引用したが「エジプトの地域は，いわば（ナイル）河の贈物ともいうべきもので，エジプト人にとっては新しく獲得した土地なのである」[17]で著名な歴史学の父ヘロドトスはナイル川のデルタ形成たらす

堆積作用と河川氾濫の原因を科学的に解明したが，インダス川についてもネアルコスは「平野上に土が運ばれて来て堆積してそれらの平野を広げるというかむしろ造成することが要因であり，堆積土は山地から運ばれて下り，すべて地味がよく柔らかい。運び下るのは川だから，平野は川に対していわば川の申し子のような関係になり，平野は川の一部だという方がよい」[18]とヘロドトスのナイルデルタの形成因を援用している。しかし，ネアルコスは逆にナイル川の氾濫の原因をインドの河川での夏期の降雨の結果起こることからヒントをえたとしている。いずれにしても当時の人々はインドの自然についての知識はある面ではかなり高かったようである。

7．インドの産業と貿易品

インドに関する産業の記述も貧弱である。気候との関連で農作物について若干述べられているにすぎない。インドでは季節風の雨期の降雨を利用して亜麻，きびの種を蒔き，ほかに胡麻，米やインドきびが植えられ，冬の乾期には小麦，大麦，豆類などが栽培される[19]と書かれている。主要農作物の種類については今もそれほど変わりはないようである。特に稲の栽培についてアリストプロスを引用して稲は水を堰き止めたその水中に立っているが，それを支えているのは床土である。そして，この植物は高さが四ペキュス（1.8メートル）で穂数が多く収穫も多い[20]。というがこれは東南アジアの浮き稲栽培を思わせる。すばる星が沈む頃に取り入れし，飼料小麦のように篩でふるい分ける。稲はバクトリアネ（バクトリア），バビュロニア（バビロニア），スシス諸地方でも生え，低地シュリア（シリア）地方でも育つ。メギロスによると稲の種蒔きは雨期に入る前におこなわれ灌漑と植え付けが必要とされ，水を堰き止め利用している[21]とストラボンはいっている。

インドきびは，オネシクリトスによれば，小麦より小粒の穀物で川と川との間で育つといい，脱穀が終わり次第，それを炒る。炒るのは種の国外持ち出しを防ぐためという。籾打ち床から火に当てないままは運び出さない[22]。「メガステネスは，インド地方がいかに豊かな土地を持つかということを示すため，作物が年に二度熟れる二期作だという点をあげる。エラトステネスの記述もこれとおなじで，冬蒔きと夏蒔きがあり降雨もおなじく二度あるという。後者によると，両季節共に雨の降らない年は一度として見あたらず，この結果，大地に実りをもたらさない季節がまったくないから（年中が）栽培適期となる。また，果樹にもゆたかに実がつき，草木でもとりわけ大きな葦が根を張り，実も根も共においしいのはその本性によるが煮沸するせいもある。ゼウスの許から落ちる雨水も川の水も太陽熱で暖まるからである。後者の著者は，たし

かに何かつぎのようなことを説明しようとしている。すなわち，ほかの地方の人びとの間では果樹や草の根にある液が（熟する）というが，これをインド地方では（煮熟する）というのは何故か，熟すると火を通して煮たのもおなじほどに口あたりが良くなるのはなぜか，ということである。著者によると，この結果，樹々の若枝はたわみやすく，これを使って輪を作るし，おなじ理由からなかには毛の花を付ける樹もある。ネアルコスによると，この地方ではこの毛で精巧な布地を織り，マケドニア人たちはこれを詰め物代わりに使い馬の鞍のクッションに使った。セレス地方の布地もこの種の材料で作り，その際ある種の樹の内皮を梳いて細糸亜麻（のよう）にする[23]」。といっているのは綿花のことではないかと思われるが，これについてはヘロドトスの「野生の木が（羊）毛の実を結び，この（羊）毛は外見も質も羊からとった毛に優る。インド人はこの木（の実）で作った衣類を用いているのである」[24]。といっているのもいずれも綿花で作った綿織物をさすものと思われる。今日でもインドにとって重要な香料についてもインドの南部の土地には肉桂，甘松香そのほかの香料類を産し，それがよく日の射すことが栽培の利点だといっている[25]。

次に，インドの貿易商品については『エリュトゥラー海案内記』が詳しく述べている。そのなかで，インドからの主要輸出品としてインド半島西岸から順にあげると，まず，インダス河口付近のミンナガル（Minnagar）付近から（これは現パタラ Patala か？）は宝石類，コストス（草の根，香料や薬品として貴重視された），ブデッラ（樹木の芳香の樹脂），リュキオン（ヒマラヤの高所に自生する Linn という植物の根や茎からとる黄色の染料），ナルドス（植物の根から採った香料，ヒマラヤに自生する高山植物？），サッペイロス（ラピズラズリか？），綿布，生糸と黒色のインディゴ（インドを代表する染料）があげられる。バリュガザ（Barygaza）からは麦，米，胡麻油や牛酪と綿，これから出来る木綿などが産出される。ここからはナルドス，コストス，ブデッラ，象牙，縞瑪瑙と瑪瑙とリュキオンと糸と木綿と絹布とモロキノンと糸と長胡麻などが輸出される。オゼーネー（Ozene 現ウジャイン Ujjain）からは縞瑪瑙や瑪瑙，上質綿布，モロキナ（繊維の一種か？）ナルドスが海岸部へ送られる。パイタナ（Paithana，ゴダバリ Godavari 川沿いの現パイタン Paithan）からは多量の縞瑪瑙がタガラ（Tagara，現テール Thair）からはありふれた多くの綿布と種々の上質綿布とモロキナが輸出されている。半島南部のタミル地方からは胡麻とマラバトゥロン（肉桂樹の一種の葉から搾られた香油）胡椒，真珠，象牙，絹織物，ナルドス，マラバトゥロンや各種の透明石や金剛石やヒュアキントス（セイロン産の宝石の一種，おそらくサファイヤであろう）の名があがっている。カンニャクマリ岬から東岸を少し北上するとコルコイ（Kolchoi，現ツチコリン Tuticorin）の周辺は真珠産地でこの真珠とアルガ

ル一織と呼ばれる上質の綿布が輸出される。ここからセイロンの真珠と透明な石と上質な綿布のほかに亀甲の産出にもふれている。セイロンは，今もダイヤモンドを除く多種の宝石の産地である。ここからコロマンデル(Coromandel)海岸を北上するとオリッサ（Orissa）州の南部に達する。そこでは亀牙を産出する[26]。「その次には東に向かって船を進め大洋を右手にとり，左手には〔インドの〕残余の部分に沿うて外海を航行すると，ガンゲース及びその付近の，東の果ての陸地たるクリューセー(Chryse, 現マレー半島）に着く。その辺にはやはりガンゲースと呼ばれる河があり，インドに於ける最大の河でネイロス（ナイル）河と同じように増水と減水とがある。其処には河と同名の商業地ガンゲースがあり，此処を通ってマラバトゥロンとガンゲース産ナルドスと真珠とガンゲース織と呼ばれる最優秀綿布とが運ばれる」[27]と『エリュトゥラー海案内記』には記されているが，インド東部地方とマレー半島が明確に認識されていないようである。これからみて，筆者がインド半島東岸から以東を実際に航行をしていなかったことが明らかである。また，この書は直接インド洋貿易に従事したエジプト人の著作だけにあくまで貿易に関係することに限ったものでインドの産物を広く紹介するものでないことに注意しておかなければならない。

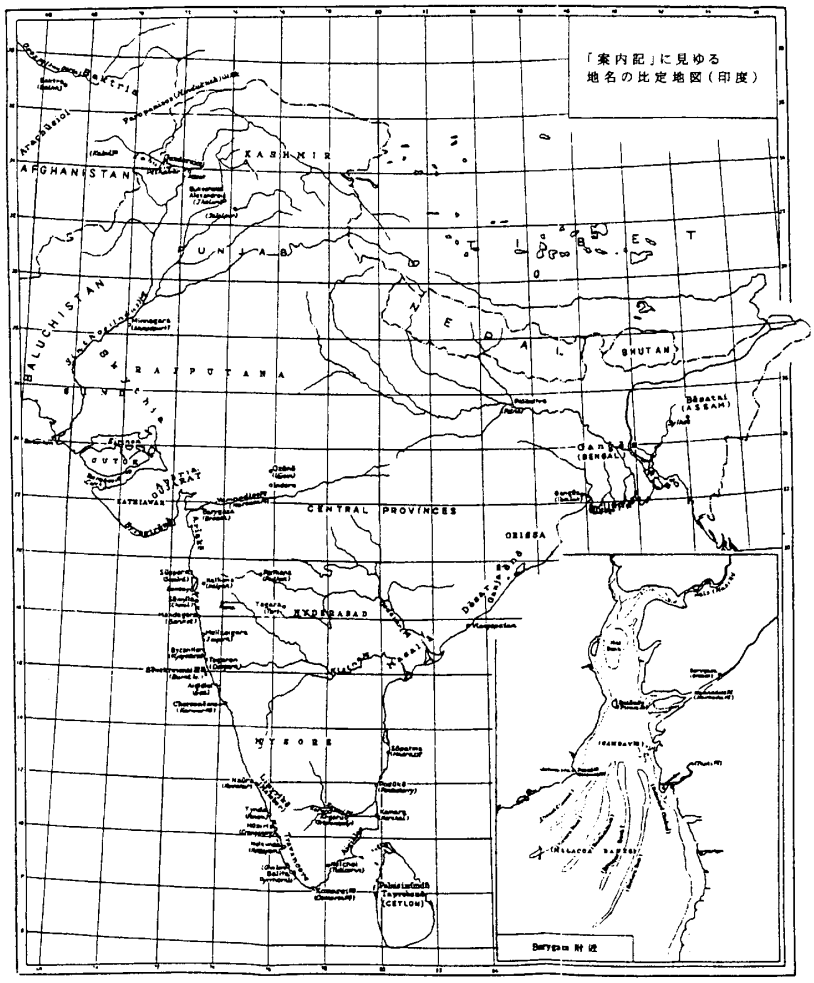

図 2　「エリュトゥラー海案内記」による

8．社会と風俗

外国人にとってインド社会での最大の関心事としてカースト制度を挙げることには恐らく依存はないであろう。カーストについては，まずメガステネスの記述が重要である。紀元前4世紀に書かれた彼の『インド誌』にはカーストの記述と考えられるものがある。もしそれがまさしくカーストであるとすれば最古の記録であるのは間違いない。そこには七つの階層をあげている。これをヴァルナをさしたものかジャーテ[28]なのかについては問題がある。そこで，その全文を採り上げる。「インド族の大衆は七つの階層に分かれる。そして，社会的評価からいうと賢者の階層が第一位だが，数は少ない。人びとが何れかの神々や英雄たちに供儀する際には公式に，何れも賢者たちに相談する。新年のこの大集会では賢者全員が王館扉前に集まると，作物と家畜の増産のためまたは国制の運営について役立つことがらがあれば，それらのなかから何でも，各自で書にまとめるか，または注意して見守ってきた上でその成果を，集会の場へ提出する。そして，提案したことが誤りだということが三度見つかると，その賢者は一生口をきいてはならないというのが法の定めで，正しかったばあいには裁定により貢納や税負担を免除してもらう」[29]。この賢者の階層というのはバラモンをさすものと思われる。

「第二の階層は農民で，数も一番多くて地位も（前者に次いで）一番高く，その証拠に兵役義務を免除され耕作権を保障してもらう。その代わり，およそどんな問題，とりわけ社会的な紛争が起こっても市域には近付かない。とにかく，おなじ時と所で，一方には兵が陣を張り危険を冒して敵と相対する状況なのに，他方ではそれらの兵に保護してもらいながら安全に耕作し畑に溝を掘っている人びとがいるのは，珍しくなかった。また，土地はすべて王領で，農民たちは賃貸料を払い収穫の四分の一をそれに加えるという条件でその土地を耕している。

第三の階層は牧人と狩人で，狩猟と家畜の飼育，それらを売りに出すこと，賃貸料を受取って荷馬車を貸すこと，はこの人びとにだけ許されている。また，土地から野生動物や種をついばむ鳥を追出して，その見返りに王から一定量の穀物を受取る。受取るのは，この人びとが諸方を渡り歩くテント暮らしをしているからである。」この移動民が遊牧民なのかインド起源といわれるジプシーなのであろうか。しかし，馬と象の飼育は一般人には許されず，どちらも王の所有物と見なされて，それらの飼育係がいる[30]。

著者によると，「狩人と牧人のつぎに第四の階層として技術を使う人，小売商人，肉

体労働をする人がいて，これらのなかには貢納分を支払い所定の公共奉仕額を提供する人びとがいる。また，武器・武具作りと船大工には王から報酬と食料の供与があるが，これはこれらの職人が王のためにだけ仕事しているからである。そして，軍備監が兵士たちに武器と武具を提供し，船舶監は船乗りや交易商人に賃貸料を取って船を貸与する」[31]。この第二から第四の階層まではヴァルナであるとすればヴァイシャをさすとみられる。

「第五の階層は戦士たちで，この人びとはふだん何も仕事をしないで酒を飲みながら日を送り，日用品は王からの支給でまかなっている。従って，いったん緊急の時がくれば迅速に出陣し，その際自分の手許からは身体以外何ひとつたずさえて行く物はない。

第六の階層は見回り役で，この人びとは領内で現に何が行われているかを見回り，それらを内密に王へ申しあげることが許されている。また，遊女たちを助手に使い，市域内の身回り役は市内の遊女を，戦場の軍では従軍慰安婦を，それぞれ使う。一番優秀で一番信頼の置ける人びとがこの役に指名される。

第七の階層は王の顧問や幕僚たちで，そのなかから国務と司法の役人および財務全般を司る役人が出る。ほかの種姓から妻を迎えること，職種・職務を取りかえること，同一人がいくつもの仕事にたずさわること，は何れも許されない。ただし，最後の項目については賢者たちのばあい例外扱いとなり，この人びとには(それを可能にする)徳があるので許される。

国務の長としては市場官，市域官，軍事官がいる。

市場官は河川を整備しエジプトでのように土地を再測量し，さらに暗渠があってそこから水がいくつもの水道へ分配されるが，その暗渠を見回って誰もが水を平等に使えるようにする。また，このおなじ役人が狩人たちの監督にも当たり，該当者にはそれ相応の賞罰を定める権限を持つ。徴税にも当たり，土地に関係する技術すなわち木こり，大工，銅細工師，探鉱師たちの技術にも監督の目を向ける。道路を作り，10スタディオン（1.8キロ）ごとに標識を設けてそれに分れ道の道しるべやを表示する。

市域監は五人一組で六組に分れ，まず職人たちの仕事を監督する組と外来の客を接待する組がいる。後者は，さらにこれらの客に宿舎を割当てお供をつけて日常の世話にあたらせ当人たちや，当人が死亡した際にはその財産を，送り出す。病気になれば看護し死ぬと葬儀を行う。

第三の組は領民の出生・死亡についてそれらの日時と状況を調査する役で，調査は課税用のほかに，新生児が丈夫かどうかを含めて新生児と死者の有無をはっきりさせるために行う。

第四の組は商品の計量と，季節の収穫物が（計量済みの）印をつけて売られるよう配慮する。同一人が複数の品物を交換することは，税を二倍納めない限り許されない。

第五の組は制作された商品を管理し，刻印をつけた上で売る役である。その際新しい品と古物を区別し，混ぜていると罰金を科する。

第六の組が最後の組で売上高の十分の一を徴税する役である。この税を自分のふところに隠すと死刑になる。

それぞれの組ごとに独自に以上の職務を行うが，そのほか共同で管理にあたる仕事としては私法上の諸問題，政治上の諸問題，公共施設の整備と価格，市場，港，神域の管理がある。

市域監のつぎに第三の部門は軍事を扱う長たちの複合体で，これも五人一組で六組に分れる。そのうちまず一組を船舶監に，次の組を牛車隊の監督役人に，それぞれ付ける。牛車隊を使って兵器，兵士と荷役獣の食料，そのほか遠征に必要な物資を運ぶ。この組の担当者たちは従軍要員としての太鼓打ち，鐘叩き，さらには馬廻り役，攻城兵器組立者とその部下をも調査する。鐘の役にはまぐさ集めの労働者を派遣し，（職務遂行の）迅速と安全を確保するため賞罰を使いわける。

第三組は歩兵隊，第四組は騎兵隊を，第五組は戦車隊，第六組は象隊を，それぞれ管理する。馬，象ともにそれぞれの畜舎があって，武器庫と共に王の所有になる。兵士は装備を武器庫へ，馬を馬屋へ象もおなじように，それぞれに返還する。また，兵士は馬や象を〈はみ〉なしで扱う。戦車は，路上では牛に引かせ，馬には引き綱をつけて連れていって足に擦り傷をつけないようにし，このようにして（戦場で）戦車を繋いだ際に馬の士気がゆるまないようにする。戦車の上には御者のそばに戦闘要員が二名立つのに対し，象の方では御者が四番目で，象から矢を射かける兵士が三人いる」[32]。

以上がメガステネスの記述であるが，第五の階層以下はヴァルナのクシャトリアとみるのは問題がある。しかしジャーティとみることもすこし無理がある。国家の官職とみることができようか。アッリアノスにもおそらく出所は同じかと思われる次の記述がある。「インド人は概して七つの種姓に分かれている。その第一は哲学者の種姓であって，名誉や位階の点でもっとも尚ばれているのが彼らである。肉体労働をせねばならないという必要にしばられているわけでもなく，働いて得たうちから公共のために，その一部を差っ引くこともしないでよいからだ。インド人共通の福利のために神々に供儀を行うこと以外，彼ら哲学者にはまったく何のつとめも強制されてはいないのである。誰かが個人的に犠牲を捧げようとするばあいは，こうした哲学者のうちのひとりがその供儀の導師をつとめる。そうしなければ神々が嘉納し給うような供儀を果

たせないというのだ。予言の術に長じているのも，インド人のなかでは彼らだけであって，哲学者種姓以外の者には予言を行うことは許されていない。予言は一年の季節に関することや，何らかの災難が社会一般の上に降りかかるかどうかについて行われるもので，個々人のために私事に関して予言を行うことは，彼らの関知するところではない。予言の術は個人日常の些事にまで及ばないかもしくは，哲学者としてそういったことにまで，あえて心は労するにも当たらないというのである。予言を行って過つこと三回に及んだ者は，そのこと故に別段の処罰をこうむるというわけではないがただし，以後は口を慎まねばならず、何びとといえどもいったん口を慎むよう宣告されたものに，強いて予言を行わせるということはできない。彼ら哲学者種姓の者は裸で日を送っており，冬場は屋外陽光の下で過ごす。夏間，太陽が照りつけるときは草地や水辺の低地で大樹の下に涼をとる。ネアルコスが語っているところではその樹蔭は，まわり四方およそ五プレトラ（約153.5メートル）にも及び，ひとつの緑陰にいてよく一万人もの人間を容れることができるという。この樹はそれ程にも大きいのである。彼らは季節の実りと皮を食用とするが，その樹皮というのは，棗椰子の実にも劣らぬほどの甘味があり，滋養分にも富んでいる。

第二番目にくるのが農民の種姓で，…ただ土地を耕すことにのみ専念し，王と自治を守る町とに貢租を納めるのである。…インド人の三番目の種姓は牧人，羊飼いや牛飼いたちである。彼らは町にも村にも住まず，移牧の民であって，山で暮らしをたてている。…第四番目は職人や小売商人の種姓である。…この種姓にはまた船大工とか，船で川を行き来する水夫たちも含まれている。…インド人の第五の種姓を成すのは戦士だ。数の上では農民に次いで二番目だが，彼らは最大の自由と快適な暮らしを享受して，…世上ことなく平和なときには彼らは楽しく暮らしている。…インド人の六番目の種姓は監督者と呼ばれるひとびとである。これらのひとびとは地方や町で起こったことどもを監督しその状況を，土地のインド人が王に統治されているばあいは王に，自治の民であるばあいにはその筋の役所に，報告する。彼らが虚偽の報告をすることはいかなるばあいにも許されないが，インド人にしてかって嘘をついた廉で告発された者は一人もいない。…第七番目は王とともにあってあるいは，自治の町でならば役所と協力して，公共のためにことは諮るひとびとである。数の上ではこの種姓はわずかだが，知恵と正義の点では万人に卓越している[33]。

他の種姓から娶ること，たとえば農民が職人から妻を迎えること，ないしその逆は法律で禁じられている。また同一人がふたつの技術をいとなむことも，ある種姓から別の種姓へ鞍替えすることたとえば，牧人から農民に移るとか，職人から牧人へ移るといったことも，掟で許されてはいない。彼らのあいだでどの種姓からも移ることが

認められているのは哲学者種姓だけだ」[34]。

これがカーストを指すのかどうかは断定できない。とくに，メガステネスの記述で見る限りカーストの内部構造としての同婚制は第七の階層つまり王の役人のみが他の種姓から妻を迎えることを許されていないと書かれるのみで他にも存在したかどうかは不明である。食事の規制には全くふれられていない。とはいえ，アッリアノスの記述には多少カースト的特色が示されているようである。なお，プリニウスも「比較的開化したインド民族の諸国民はその生活様式において多くの階級に分かれている。土地を耕すもの，兵役に服するもの，自国の商品を輸出し，外国から品物を輸入するものがある。一方最善にして最富裕の人々は政治にたずさわり，裁判官や王たちの顧問をつとめる。第五の階級の人々があって，知恵に身を委ねる。知恵はこれらの人々にとっては最高の名誉とされ，ほとんど宗教にまで高められている」[35]。と記述している。これらから「ヴァルナ＝ジャーティ制」[36]としてのカースト制度が表現されているとみるのが妥当であろう。このほかにメガステネスは賢者を二つに分類して一方をブラクマン，他方をガルマンと呼んでいる。そして前者の方が世評も高く実際に教説の面でも後者よりよく世に容れられているという[37]。

インド側からみてカーストに関してアーリヤ人による最古につくられた『リグ・ヴェーダ賛歌』の「プルシャ（原人）の歌」[38]にヴァルナが初出するが，紀元前八世紀頃までにはバラモン，クシャトリヤ，ヴァイシャ，シュードラという四つの社会階層を表現するヴァルナという言葉が存在したと考えられている。それだけに，メガステネスがインド滞在中にカーストに関する知識を得たとしても不思議ではない。

つぎに冠婚葬祭についてみる。アッリアノスによると「ヘラクレスの娘が統治していた土地では，女性は七歳にして結婚の適齢期に達し，男の方もたかだか四十歳が生きる限度だという。このことについてインド人のあいだにはひとつの話が伝わっている。年齢がいってから娘を生(な)したヘラクレスは，自分の死期が近づいたのを悟ると，わが娘を嫁がせるに然るべき男がいないためみずから七歳になるわが娘と交わり，自分と娘の間にできた子が，インドの王として後に遺るようにしたという」[39]。これはインド最古の『マヌの法典』の「三十歳の男子は好ましき十二歳の少女と結婚すべし。二十四歳の男子は八歳の少女と結婚すべし」[40]に通じるものがある。「男はもっとも長寿の者でも，まず四十歳を一期として生涯を終えるという，そのことについてだ。けだし男には老いがそんなにも速やかにやって来，死もまた老いにあい伴うとするならば，いずれにせよ人間一生の盛りの時期も，終りのときに比例して，たしかにそれだけ早く花開くだろうからである。そう見れば男三十はいずれにしても初老の域であり，二十歳ともなれば若者も青春を過ぎ青春の真っ盛りといえば，これは十五歳前後とい

うことになるわけで，同じように考えれば女性も七歳にして，すでに結婚できる年齢に達するというのが，理屈にかなうことになるだろう。それというのもメガステネス自身がまた，このインドの地では果物でさえ，他所より早く熟し早く傷むと誌しているからなのだ」[41]。と，インド人の早婚であることを述べている。これは現在のインドでも認められるもので，インドで1929年に幼児結婚禁止法が制定されるまで年少者の結婚が広く行われていたのである。その理由の一つとしてカーストによる婚姻規制が厳しく，結婚相手を選ぶことの困難さがあったという。ただ，早婚といっても，夫婦が結婚生活にはいるのは女性で14，15歳頃，ガウナ(gauna)などと呼ばれる二度目の結婚式以後である。しかし，この文は幼児結婚に関する最古の記録の一つと思われる。つぎに注目されるのは，「カタイア（現パンジャブ地方）族に特有な風習として史書に報告されていることだが，花婿と花嫁は互いに自分であいてを選び，夫が死ぬと妻もいっしょに火中に投じられるが，この習慣は，かって妻たちが若者を恋して夫を捨てたり毒を盛ったりしたことがあったことに起因するという」[42]。これは，サティーが法的に禁止された以降も屢々おこり，特に1987年9月にラジャスタン(Rajasthan)州で結婚後6ヶ月で夫に死別した18歳のループ・カンフルのサティー（寡婦殉死）[43]事件はインド国内で大きな論議の的となったが，上記の文はこのサティーと思わせる。

9．民族と日常生活

プリニウスによれば「アレクサンドロス大王に従った人々は，彼によって征服されたインドの地域には，いずれも人口二，〇〇〇を下らない町が五，〇〇〇もあり，九つの国民がおり，全陸地の三分の一を占めていて，そこの住民は無数であると書いているが，これはたしかに非常にありそうな説である」[44]。「セネカもまたインドについての記事を書いたわが国の著作者の一人だが，インドの河の数は六十，民族は一一八であるといっている」[45]。

アッリアノスも「メガステネスが誌すところによると，インドの種族は全部で百十八ある。私自身もメガステネスと同じ意見だが，彼がいったいどんな風にしてその正確な数を知り記述したものか，私としては推測がつかない。メガステネスもインドの土地をあらかた踏破したわけではないし，インド人種族の全部，おたがいに接触交渉があるというのでもないからだ」[46]。以上のことは種族の数の真偽はともかく，ヘロドトスも言っているように互いに言語が異なり，その生活習慣も多様なことを理解していたことが解るのである。

食習慣については，いまもインド人のかなりがベジテリアン（菜食主義者）である

がこれを徹底して守るジャイナ教徒[47]を思わせる記述がヘロドトスの『歴史』の「彼らは生物は一切殺さず，農耕も営なまず」[48]にある。

衣服材料はヘロドトスによるとインド人は木綿の衣服を縫い[49]と記し，この木綿とはギリシアではドイツ人と同じように「木の（羊）毛」[50]と言っていたためにこう呼ばれたという。アッリアノスは「ネアルコスによれば，インド人はリンネルの着物を着ている。リンネルがどんな木からとれるかはすでに述べた。このリンネル（地の着物は，その色の点では他のどんな）リンネルよりも白い。あるいは着ている彼ら自身が黒いので，そのことがリンネルを一段と白くきわだたせているのである。彼らのリンネルの肌着はふくらはぎの中程まであり，上着の方は肩のまわりに投げかけ，もう一枚はそれで頭を包むのである。インド人の中でも格別裕福なひとびとは象牙のイヤリングをつけている。それは必ずしもインド人の皆が皆，身につけるわけのものではない。ネアルコスが語るところでは，インド人はその顎髭を染めており，それもさまざまな色合いに〈染めなしている〉。あるひとびとが白さもできるだけ真っ白く見えるようにするかと思えば，あるひとびとは濃紺に，あるいは深紅あるいは紫，また別のひとびとは草色に染めるといった具合である」[51]と木綿や亜麻や衣服材料に用いられたようであり，多彩な染料が用いられている。しかし，先述の『エリュートゥラー海案内記』のインドの輸出品に多くの繊維材料があがっていることはこの国では多様な繊維が用いられたことをものがたっている。

10. そ の 他

古代の著者が興味をもち採り上げたものは多い。しかし，そのなかにはかなり信憑性に欠くものがある。ここではこれまでに採り上げてこなかったものを若干記すにとどめる。これは問題のある点であるがインドに奴隷がいないと書いていることである。「インド民は誰も奴隷を使役しない」[52]「インド人はすべて自由民であって，いかなるインド人といえども奴隷ではない。…インド人は一人として奴隷ではないのである」[53]。しかしマウリヤ朝の宰相カウティリヤの『実利論』の第3巻に《奴隷と労働者に関する法規》[54]がありインド研究者ではその存在は疑う余地がない。

この他にもカルカッタ植物園の樹高30メートル，周囲が400メートルで元の木から伸びた幹の数が約300本というバニヤン樹は有名であるが，「一本の樹の下で騎馬隊が五十騎も日陰に入って真昼の一刻を過ごしたほどだったし，オネシクリトスはこの数を四〇〇騎としている」[55]。恐らくこのようなバニヤン樹についての記述であろう。この他にも今のインドにみられるようなものが多くあげられている。そのなかで最後に一

つのものをとりあげる。それは，象狩りについてである。

「インド人たちは概してギリシア人と同じやり方で野獣狩りをするが，彼らの象狩りだけは，他のどんな種類の狩りの仕方とも違っている」[56]。〔狩りの対象となる〕動物そのものが他の動物どもとは全く異なっているからだ」[57]。象狩りに関する説明はアッリアノスとストラボンの双方の記述に多少異なる点がありこれを一つにまとめたものをあげるが，両者は明らかにメガステネスからの引用である。「インド人たちはまず平坦で陽射しのきつい裸地の場所を選ぶと，大軍勢がその中で宿営できる程の大きな濠を環状に掘りあげる。約四・五スタディオン（0.7—0.9キロ）長さの，（そして）濠の幅はおよそ五オルギュイアイ（約9.2メートル）四オルギュイアイ（約7.4メートル）程にするのである。濠から掘り上げた土は濠の両側の縁に積み上げて，防壁代わりに利用する。その上で彼らは濠の外縁にできた土山の下部に自分たち用の掘り抜きの隠れ場をつくり，小窓を穿ち残してそこから（内部の）自分たちのところまで外光が届くように，また動物（象）どもがやって来て囲いの中に入り込むのが見えるように，それから，とてもよく飼い慣らした雌象を三，四頭そのなかへ放ち，入り口をできるだけ狭い橋で繋ぐ。そして，そこに入る道を一本だけ残しておく。橋にたくさんの盛り土や草をかぶせておくのは，動物どもがその橋を遠くから見分けて，何かそこに罠が仕掛けられているのに，感付くことがないようにするためなのだ。そうしておいて彼らはそこを立ち退き，濠の縁の隠れ場に身をひそめる。野生の象というのは昼日中，人の住むあたりに近づくことはないが，夜になるとちょうど牝牛が牡牛につき従うように，仲間うちでももっとも大きくすぐれた牡の後に従って，いたる所を徘徊するものなのだ。その象どもは囲いに近づいて牝が啼く声を聞き，その匂いを嗅ぎつけると，囲い込まれた土地目がけて突進してくる。そして濠の外縁沿いに回りめぐるうち橋のところに行き当たると，象どもはそこを通って囲いの中に押し入ってくるのである。さて人間たちの方は野生の象の群が入ってきたのを見届けると，ある者たちはすばやく橋を取り除け，別の連中は近くの村々に駆け出して行って，象が囲いの中に入ったことを知らせる。知らせを聞いた方は元気一杯の，もっとも手馴れた象にうち乗ると，戦闘用に飼い慣らした象の中でも一番勇気のあるのを連れてはいる。（囲いに）馳せ向かったからとてすぐさま闘いにかかるわけではなく，野生の象どもが飢えに苦しみ渇きで苦しむがままに放ったらかしておく。相手の象どもが体力消耗したと判断されると，そこではじめて彼らはふたたび橋をこしらえて，囲いの中へ突入するのである。はじめのうちははげしい争闘が，飼い馴らされた象と虜になった象との間にもちあがるが，やがてついには野生の象どもの方が予想どおり，意気阻喪と空きっ腹で疲労困憊したあげく圧倒されてしまう。飼育象の御者たちのなかでも一番勇敢なものたちが，

こっそり象から下りるとそれぞれ自分の乗っていた象の腹の下に潜り込み，そこから走り出て野生象の下に潜ると四足とも縄で縛る。その上で手飼いの象どもに命じて，その雄叫びで相手を打ちのめさせる。人間はかたわらに立つと象ども頸のまわりに剝いだままの牛皮で作った輪索をひっかけ，横倒しになった象によじのぼる。彼らは象が乗り手を振り落としたり，その他むやみな荒れ方を仕出かしたりしないように，象の頸筋に鋭利な短刀でぐるりと切り込みを入れ，その切り目沿いに例の輪索を巻き付ける。頭や頸を，傷の痛みから振り動かせないようにするのである。もあい象が不逞な考えを起こして頭をねじ向けようとすれば，縄目の下の傷が擦れることになるからだ。こんな風にして象はおとなしくなり，もはやこの上は闘いに敗れたことを観念して，手飼の象につながれて曳かれていくのである。まだほんの仔象だとか，使役用には年をとり過ぎている象やどこかに欠陥があって捕獲するだけの値打ちもない象はいずれも，象どもがふだん出没する場所に放される。捕獲した象を村へ曳いてきた者たちはまず，象舎に連れていき，足と足とを結びしっかりと地面に打ち込んだ柱へ首を結びつけると，餌をやらないでおとなしくさせる。それから緑の芦萩や草葉を飼料としてあたえてやるが，象の方はすっかり意気阻喪してなにを食べる気力もない。するとインド人たちは象どものまわりに円陣を組んで，歌をうたい太鼓やシンバルを打ち鳴らしながら，彼らをあやして眠り込ませようとする。というのも心の賢い獣がもしいるとすればそれは，象をおいて他にないからだ。その後でいうことを聞くように教え込み，そのばあい象によって言葉をかけるやり方と歌や太鼓を聞かせて心を奪うやり方があるが，馴れ難い象はめったにない。というのも，象は本性穏やかにおとなしく行動し，この点で理性を持った生物にきわめて近い。実際ある象どもは己自信の乗り手が戦場で倒されてしまうと，みずから〔その遺体を〕拾い上げて，埋葬するために運び去っているし，ある象は地上に横たわった乗り手を庇いあるいは，傷つき倒れた乗り手を護ろうとして，己が身を危険にさらしてもいる。この著者やほかの人々ものべているところによると，インド象はリビュア象より大型で力も強く，だから後足で立ち上がると鼻で胸壁を払い除け樹木を根こそぎ引き抜く。ネアルコスによると，象狩りの際，象の通り路が交差しているところに足を挟む罠を仕掛けると，飼育象を使って野生象の群を罠のところへ追い込ませる。これができるのは，飼育象の方が力も強いし御者がついているからである。また，象はとても馴らしやすいから，的へ石を投げ武器に使うことをも覚え，泳ぐのはしごく巧みである[58]。

さて，現在のインドでも，象が捕獲され，使役用，観光目的など広く飼育されているが，近年，森林の伐採が進み野生象の生活圏が狭められ人家近くの水田の稲や畑作物を餌として荒らすようになっている。この防止を目的として野生象の捕獲がおこな

われている。その捕獲法の一つを示すことにする。

象の捕獲人は村人を動員してまず松明を作らせる。そして象の出没する夕方に彼らの潜む森に入り大声を上げ松明をかざして追い立てる。捕獲人はよく慣らしたクーンキーと呼ばれる象2頭に各々2名ずつ乗って用意したロープを持って象の群の中にはいる。象に乗った2名のうち前に乗った者の役割は象の舵取りとロープを捕獲する象の首に巻き付ける。後ろの者は象の歩くスピードを加減することである。象は視力が弱いのでまず乗っている人間には気づかない。クーンキー2頭で象を挟み首にロープをかける。象が暴れるとロープは締まっていくのである。村には丸太で巨大な檻が作られる。できた後では浄めの儀式が行われる。檻に入れられた象は象調教師の手に渡される。象を馴らすには同じ人間が行うが，その臭いを覚えさせるためその身体を決して石鹸で洗わないようにする。

馴らす期間は若象で2～3週間，成象になると2～3ケ月あるいはそれ以上もかかる場合もあると言う。先ず調教人は象にたいし自分がボスであることを覚らせる。そうして檻の外から飴と鞭での調教が始まる。最初は言葉で座れ，立て，から前へ，後ろへ，と次第に動作を覚えさせるのである。上手くできないときは鞭でたたく。上手くやれば口にさとうきびを入れてやる。食物は決して鼻を使って食べさせない。これは象を再び野生に戻さないためである。次第に命令を覚えると檻の真ん中に棒を一本いれて檻を狭くして訓練する。そのあと，檻の前で香をたき，神に祈りを捧げて無事を祈る。その後，調教人は檻の中に入って象の背中に乗り一本の棒を片手に声だけで動作を覚えさせる。飼い慣らすことができると，その印として足に鎖を巻き付ける。この後，この象を使って丸太で作られた檻を解体させて調教は終わりとなる。象には化粧をほどこしすべてが終了する。昔と比べて野生象の捕獲は簡単になっているようである。

おわりに

古代の人々のインドの知識については荒唐無稽な話なども多いが歴史的記録の少ないインドにあってこれらの記述の真偽はインド史を深めるためにもおおいに検討すべきであり，今後も多くの資料が発掘され，その検討をすすめることが望まれる。限られた資料によるこの研究はきわめて不十分ながらあえてまとめたものである。

注

1）アッリアノス：「インド誌」，917～919pp
2）プウリニウス：「博物誌」，260p
3）ストラボン：「世界地誌II」，396p
4）注1）919～921pp
5）注1）923～925pp
6）「エリュトゥラー海案内記」，124～125pp
7）ヘロドトス：「歴史」，世界古典文学全集10，筑摩書房，73p
8）注3）386pp
9）注3）388p
10）注3）388p
11）注1）935p
12）注3）385p
13）注1）935～937pp
14）注6）126p
15）注2）259p
16）注3）386～387pp
17）注7）73p
18）注3）386p
19）注3）385p
20）注3）388p
21）注3）386p
22）注3）389p
23）注3）388p
24）注7）160p
25）注3）391p
26）注6）125～141pp
27）注6）141p
28）ヴァルナ（varna）は語源的には「色」を意味するが，バラモン，クシャトリア，ヴァイシャ，スードラの四姓を指す。ジャーテイ（jati）とは「生まれ」を意味し，地域社会の日常生活において独自の機能を果たしている集団であり，その数は2000～3000にも及んでいる。
29）注3）403～404pp
30）注3）404p
31）注3）407～408pp
32）注3）408～409pp
33）注1）951～957pp
34）注1）959p
35）注2）261p
36）「ヴァルナ＝ジャーティ制」とは，すべてのジャーティが四ないし五のヴァルナの枠組みの中に位置づけられ，上下の序列化された社会制度。

37) 注３）414～416pp
38) 辻直四郎訳「リグ・ヴェーダ讃歌」，岩波文庫，318～321pp
39) 注１）745p
40) 田辺聖子訳「マヌの法典」，岩波文庫，275p
41) 注１）947p
42) 注３）398p
43) サティーとはヒンドゥー教徒の古い習慣で，寡婦が夫の火葬の時，一緒に生きながら焼かれ葬られること，または，その後に殉死すること。
44) 注２）257p
45) 注２）259p
46) 注１）937～939pp
47) ジャイナ教とは仏陀とほぼ同時代にマハーヴィーラを祖師とし，アヒンサー（不殺生）の戒律を遵守するインドの宗教。
48) 注７）138p
49) 注７）324p
50) 注７）325p の脚注
51) 注１）971～973pp
52) 注３）411p
53) 注１）951p
54) 上村勝彦訳「実利論上」，岩波文庫第３巻第13章に記されている。
55) 注３）390p
56) 注１）959p
57) 注１）959p
58) 注１）959～965pp と注３）404～406pp から編集したもの。

参考文献

アッリアノス，大牟田章訳（1996）：「アレクサンドロス東征記およびインド誌」，東海大学古典叢書，東海大学出版会
村川堅太郎訳（1946）：「エリュトゥラー海案内記」，生活社
同　　（1993）：同　中公文庫，中央公論社
ストラボン，飯尾都人訳（1986）：「ギリシア・ローマ世界地誌Ⅰ・Ⅱ.，龍渓書舎
プトレマイオス（1978）：「プトレマイオス世界図，―大航海時代への序章―」，岩波書店
プトレマイオス（1986）：「プトレマイオス地理学」，東海大学出版会